

『貸した金は返せるが、受けた恩は一生返せない』

～堀之内九一郎著「野良犬の成功法則」より～

恩というものは、一度受けたら、返せるものではないというのが私の考えです。浜松にたどり着いたばかりのころ、まだ屋根のある部屋に住めたころのことです。

屋根はありましたが、電気を止められたことがありました。

そのとき食べ物を持ってきてくれた人がいました。

「お前、食うものがないだろう」

そう言って、大根やニンジン、キャベツを担いで持ってきてくれたのです。

「お互い、金がないのは同じだろ。買ってきたのか」

そうと聞くと彼は「いや」と言います。彼の家の神棚にお供えしたものを持ってきたと言うのです。

彼が持ってきてくれた野菜を、電気もつかない暗い部屋で、まだ通っていたガスで煮炊きした覚えがあります。久しぶりに食った新鮮な野菜を、これほどおいしいのかと感動したものです。

彼はいまでは、自分の会社を起こし、そこで大成功しています。

あれから二十年以上たちますが、一緒に食事をするたびに、あのときのことを思い出して「ありがとうね」とお礼を言わずにはられません。

私は彼にお金を貸したことがあります。それでも、あの野菜を担いで来てくれたことへの恩は、まだ返せていないと私は思っているのです。

借りていたお金を返したとします。そこで多くの人は「これで恩を返した」と思

うから、お金の話をされると、「いつまでも、恩着せがましい話をするなよ」という傲慢な気持ちになるのではないのでしょうか。

一度借りた恩は、なかなか返せるものではありません。生死に関わる金を借りたとき、その金を返しても恩を返したことにはなりません。飢え死にしそうなとき、一杯のご飯をご馳走になったら、あとで食事をおごってもその恩を返したことにはなりません。

その人が困って、「助けると思って、金を貸してくれ」と頼まれて金を貸したとき、初めて恩を返せるのです。大根やニンジンを持ってきてくれた彼がメシが食べられないような状況になり、そのとき私が、大根やニンジンを持って行って初めて恩を返せるのです。